

# ジャイナ哲学における śabda 観について

——原子説との関連において——

安 藤 嘉 則

## I. は じ め に

インド哲学において śabda という語は、周知の如く単純に「ことば」「語」として理解・翻訳することはできない。この śabda の概念の範囲は、各学派によって異なっており、まさに各派の有する śabda 観がそのままそれぞれの言語哲学を大きく特徴づけているといえよう。

例えば Patañjali や Bhartṛhari によって大成された文典派においては、śabda は非人為的 (apauruṣeya) で永遠の实在としての sphoṭa であり、この sphoṭa の属性 (guṇa) としての音声 (dhvani) によって、永遠なる śabda が開顕する<sup>(1)</sup>と考えられている。つまり文典派は通常の音声とは別に普遍的な śabda を認め、これが表示機能を有すると考えたのである。しかし Vaiśeṣika 派においては、śabda はあくまで音声・音響として捉えられており、それは虚空の属性 (guṇa) に他ならず、それ自体は刹那滅即ち無常なるものと考えられている<sup>(2)</sup>。

このように śabda と「ことば」・「音声」との概念上の関係はそれぞれの学派によって一定せず、śabda という梵語が多様な意味合いを有しているのも、このような状況に起因するのであろう。

ところでジャイナ哲学における śabda の用例も様々であり、śabda は「ことば」そして「音声」をも意味し、さらに間接的な認識根拠 (parokṣa) の一種としての śabda (聖言量) にも用いられている<sup>(3)</sup>。またこの他ジャイナ独特

の用例としては、7つの Naya の 1つに位置づけられる。Naya とは対象の部分的認識における観点を指し、実体に基づく Naya (Naigama, saṃgraha, vyavahāra) と様態に基づく Naya (ṛjusūtra, śabda, samabhirūḍha, evaṃ-bhūta) に大別される<sup>(4)</sup>。このうち後者の様態に基づく Naya に位置づけられた śabda とは、同義語間の相違を度外視する観点であるとされる<sup>(5)</sup>。

以上の如く、ジャイナにおける śabda の多様な意味内容を見たのであるが、本稿で Pramāṇa や Naya としての śabda については考察の対象とせず、言語説に関わる śabda を中心に、ジャイナ教徒が śabda の本質をどのように捉えていたのか、について検討を加えたい。

## II. 他学派の紹介するジャイナの śabda 観

そこでジャイナ教文献を調査する前に、ジャイナ教以外の諸哲学学派が、ジャイナの śabda 観をどのようにみていたのか、散見してみたい。

Śāntarākṣita の TS, Śrutiparīkṣā では、śabda の永遠性、非人為性を説く Mīmāṃsā 派の言語説を主な批判対象として、仏教の立場より śabda の無常性を証明することが意図されている。そしてこの一連の議論の手続きとして、第 2309 偈—第 2310 偈において、インド哲学各派の言語説が紹介・列挙されている。

この śabda は無常である、ということが成立するというべきであろうか。これ(śabda)は (1) 3つの属性であるのか、(2) 物質から成るものであるのか、(3) 虚空の属性であるのか、(4) また字音とは異なる音声を本性とするものであるのか、(5) 表示機能をもたない[単なる]風を特相とするものであるのか、(6) 単語や文を本性とする sphaṭa であるのか、(7) 単なる相似性であるのか、(8) 他者の排除であるのか<sup>(6)</sup>。

Kamalaśīla の *Pañjikā* によると、上述の八つの見解は順に [1] Sāṃkhya 派 [2] Digambara (ジャイナ教空衣派) [3] Vaiśeṣika 派 [4] 世間の人々

(Laukika) [5] 音韻学者 [6] 文典派 [7] Vindhyavāsin, [8] 仏教の Apoha 論者、とされている。

このうち [2] のジャイナ教空衣派の学説について Kamalaśīla は

空衣派によって [śabda が] 物質より成るもの (pudgala) と [考えられている]。物質 (pudgala) とは原子 (paramāṇu) であるといわれ、それら (諸原子) としてこれ (śabda) が [存在するというのが] pudgala ということであり、それ (原子) を本性とする、という意味である<sup>(7)</sup>。

pudgala とはジャイナにおいて、5つの基本原理 (pañcāstikāya), もしくは実体 (dravya) の1つに含まれ、物質的原理として位置づけられるものである。そしてこの pudgala は原子から成り、śabda も pudgala または原子によって成立せしめられていることが提示されたのである。

Śāntarākṣita 以前では、Bhartṛhari が VP の第1章に śabda の本質について三種の異説を提示する中で、その第二の異説として、śabda の本体を「śabda の原子」とする学説が紹介されている。

(1) 風・(2) 原子・(3) 知が [それぞれ] śabda となる、と人々は説く。  
(VP, I. 110ab)

原子は分離・結合の作用を有する。[原子は] 一切の能力をもつが故に。  
[そしてこの原子は] 影・熱・闇・音声 (śabda) という状態として転変する。(VP, I. 113)

śabda と名づけられた諸原子は、自らの能力が顕現しつつあるとき、[人間の] 努力によって集合した [状態になる]。ちょうど雲が集合するように。(VP. I, 114)<sup>(8)</sup>

Bhartṛhari も、そして VP の Vṛtti においても<sup>(9)</sup> その学派名をあげて説明する訳ではないが、これはジャイナの学説であると考えられる。なぜならば VP. I. 113cd の記述は、まさに後述の TAS, V, 24 を前提にしたものであるからである。そしてここでも原子の集合として śabda が考えられていたこと

が、知られる。

さらに Mimāṃsā 派の Kumārila Bhaṭṭa による ŚV, Śabdanityādhikarāṇa (= Śn 声常住章) においても各派の言語説が所破として紹介されているが、そこでは Vaiśeṣika 派の言語説批判の後にジャイナ（並びに Sāṃkhya 派）の言語説が取り上げられる。

ジャイナとカピラによって示された, śabda と耳[の働き]などの関わり方は、これ (Vaiśeṣika 派) よりも好ましい。しかしこの〔学説〕も道理によって確定しない。(ŚV, Śn, 106cd-107ab)

〔ジャイナ教徒は〕まず śabda の生起について〔次の如く〕考えている。〔即ち śabda とは〕, 物質性と可触性等を有し (mūrti sparśādīmatvam), それら存在するものの中で卓越したものであり、触覚器官の対象であり、諸々の微細な要素といわれるものである。〔しかし、このような śabda は実際には〕経験されない。(ŚV, Śn. 107cd-108cd)<sup>(10)</sup>

この Kumārila Bhaṭṭa の紹介するジャイナの言語説では, śabda が物質性 (mūrti) を有すると同時に、可触性をも有するものとして考えている点が注意されよう。通常 śabda (音声) は聴覚器官によって知覚されるとされるが、これによるとジャイナは触覚器官の対象としても考えていたことになる。

以上のように他学派文献においてジャイナ独特の物質的 śabda 観をみることができたのであるが<sup>(11)</sup>、これが果してジャイナ教文献において確認されるであろうか。以下に考察を加えたい。

### III. ジャイナ教文献における śabda 観

#### a. ジャイナ哲学における śabda の分類

そこではじめに白衣派・空衣派両派が重視する Umāsvati の TAS について、śabda に関連する記述を提示しよう。

まず *TAS* の第 2 章では、五感官の対象としての śabda が言及される。

〔五感官とは〕 触覚器官・味覚器官・嗅覚器官・視覚器官・聴覚器官である。( *TAS*. II. 20)

触 (可触性)・味・香・色・音声 (śabda) はそれら (五感官) の対象である。( *TAS*. II, 21)

また第 5 章では物質 (pudgala) が中心テーマとして説明されているが、ここでは次のような記述をみることができる。

物質は触 (可触性 *sparśa*)・味 (*rasa*)・香 (*gandha*)・色 (*varṇa*) を有し, ( *TAS*. V. 23)

また音声 (śabda)・結合 (*bandha*)・微細 (*saukṣmya*)・粗大 (*sthaulya*)・形状 (*saṃsthāna*)・区分 (*bheda*)・闇 (*tamas*)・影 (*chāyā*)・燃 (*tapo*)・光 (*dyota*) を有する。( *TAS*. V. 24)

このように *TAS* 第 5 章において、明確に śabda が物質の範疇に組み込まれていることが理解される<sup>(12)</sup>。

そこでこの *TAS*, V. 24 に説かれた śabda について、空衣派で最も権裁のある *TAS* の註釈書 *SAS* と、白衣派での *TAS* の註釈書で *Umāsvatī* の自註とされる *TASBh* の釈文を提示したい。

〔*TASBh* における śabda の解説<sup>(13)</sup>〕 śabda は六種である。〔1〕 *tata* 音 (太鼓=*mṛdaṅga* のような音) 〔2〕 *vitata* 音 (*vīna* など弦楽器のような音) 〔3〕 *ghana* 音 (シンバルのような音) 〔4〕 *śusira* 音 (*venu* など笛の音) 〔5〕 *saṃgharśa* 音 (木を銚などでこするのような音) 〔6〕 ことば(語・句・文によって構成されたもの)<sup>(14)</sup>

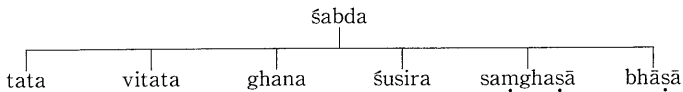
〔*SAS* の śabda の解説〕

śabda には言語を特相とするものと、言語を特相としないものとの二種がある。〔このうち〕 言語を特相とするものには〔さらに〕二種類ある。文字を伴うものと文字を伴わないものとである。文字によって作られた

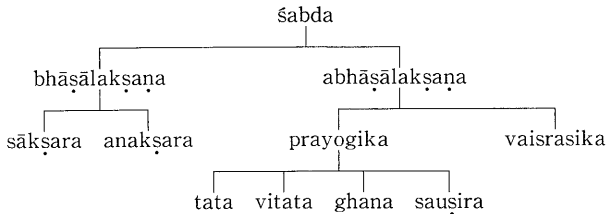
ものは、聖典によって明らかに知られる。言語が完成されているか、否かの違いによって、聖なる者の言話活動や野蛮人の言語活動の原因が〔生じるのである〕。文字を伴わないことを本性とするものは、二感官を有するものなどによって、より優れた知の性質を理解する因となる。この〔言語を特相とする śabda〕はすべて〔生類によって〕意図的に発せられたものである。〔一方〕言語を特相としない śabda にも二種類ある。意図的に発せられるものと、自然に発せられたものとである。自然に発せられるものは、雷雲などによって生じた〔śabda〕である。意図的に発せられるものには、tata 音、vitata 音、ghana 音、sauṣira 音という区別があるので四種である。このうち tata 音とは皮によって覆われた〔楽器〕による音で、puṣkara, bherī, daidura などの〔太鼓〕によって生じた音である。vitata とは、弦楽器の vīna, sughoṣa などから生じた音である。ghana とはシンバル (tāla) やベル (ghaṇṭā) を鳴らして生じた〔音〕である。sauṣira 音とはフルート (vaṃśa) やほら貝から生じた〔音〕である<sup>(15)</sup>。

以上の記述をまとめると以下の図の如くである。

〔TASBh〕



〔SAS〕



以上の如く空衣派・白衣派の両派の śabda の分類の仕方は異なっている。

TAS*Bh* では、言語としての音声と楽器などの種類によって5つの異なった音声に分類するだけで、簡潔な説明となっている。一方 SAS では、最初に śabda を言語を特相とするか、否かで大別し、さらに文字や意図的作用の有無によって再分類され、より分析的な考察をみることができたのである。従ってこれらの文献によると、ジャイナ哲学における śabda とは、物質に属し、文字表現される言語的側面から、楽器の音から自然発生的な音声に至るまでの概念が与えられていたのである。

b. ジャイナ哲学における śabda の存在論的分析

しかしながら以上の śabda の分類はひとまず置き、尚次のような重要な問題点が残されていると思われる。即ち TAS. V. 23-24 でみた如く、śabda が物質 (pudgal a) の有するところのものとして位置付けられたものの、śabda が存在論的に pudgal a にどのように関わっているのかが吟味されるべきであろう。例えば Vaiśeṣika 派は śabda をはじめ、色・香・味等を実体の属性として捉えているが、はたしてジャイナはこの点についてどのように考えていたのであろうか。

というのもジャイナの存在論では、物質を含めたすべての実体 (dravya 白衣派では5つ、空衣派では6つ) について次のような有名な定義があるからである。

実体は属性 (guṇa) と様態 (paryāya) とを有する (TAS. V. 37)

従って今ここに検討しようとする śabda, そしてその他 TAS. V. 23-24 で列挙された可触性 (sparśa) 等の各々が、それぞれ pudgal a という実体に対して属性として存するのか、様態として存するのか (あるいは属性・様態以外のものであるのか)、という問題が提起されるのである。

特にこの TAS. V. 23-24 で注目すべき点は先に TAS. II. 21 において śabda が他の可触性等の四と共に感官の対象として同列に配されていたにもかかわらず、TAS. V. 23 では śabda のみが他の可触性等の四から排除され、

V. 24 の十項目の中に配されている点である。śabda は他の四つの認識対象と存在論的に異なって捉えられているのではないであろうか。この点について *TASBh* は

これ (*TAS. V. 23-24*) に対して述べる。「可触性等と śabda 等とは別々にストトラにされているのは何のためであるのか。」答えていう。「可触性等は諸原子において存在し、また蘊においては転変によって生じたものだけが存在する。然るに śabda 等は蘊にのみ存在し、また多数の因を有するものとして存在する。故に別々にされたのである<sup>(16)</sup>。

と説明しており、*TAS. V. 24* に配列された śabda 等は蘊においてはじめて存在するものとして、*TAS. V. 23* の、原子に内在する可触性等と区別されているのである。しかしながら、この *TASBh* と *SAS* も先に問題提起した *dravya* と *guṇa*・*paryāya* の関係として論及されることはない。

そこで次に *Umāsvāti* と並んで重要な *Kundakunda* (空衣派) の綱要書を参照し、上記の問題について同様に考察したい。まず彼の代表的著作である *Pañ* にはこれについて次のような記述を見ることができる。

すべての蘊 (*skandha*) の究極〔的存在〕は原子である、と知るべきである。それは永遠であり、śabda (音声) を有しないものであり、1 つのものであり、部分をもたず、物質的な存在である。(*Pañ 77*)

名称によって物質であり、四元素の因であり、転変と属性とを有し、それ自体は śabda をもたないもの、それが原子であると知るべきである。(*Pañ 78*)

śabda は蘊として生じる。蘊は原子が接触して集合したものである。それら (蘊) が接触したとき生じたのが śabda である。〔そしてそれは〕発生的であると決定される。(*Pañ 79*)

1 つの味・色・香と 2 つの可触性を有し、śabda の因であって、〔それ自体は〕 śabda を有せず、蘊とは別異である実体、それが原子であると知る



べきである。(Pañ 81)<sup>(17)</sup>

ジャイナにとって、原子とはこれ以上分割され得ない(=部分をもたない)存在であって、粗大な物質を破壊・分割しようとも、原子自体は永遠の存在である。そして Pañ 81にみたように、一つの原子には可触性等の四が存するものの<sup>(18)</sup>、śabda は決して存することはないと明言されていたのである。Kundakunda によると、śabda が発生するのは原子の集合(蘊)と集合とが互いに接触して生じるのである。(Pañ 79)

ところでこの śabda、そして可触性等の四について Amṛtacandra の註訳 TPV は次の如く述べている。

なぜならここで外的な聴覚器官(=耳)に支えられた状態感官によって決知された音(dhvani)が śabda であるから。実にそれ(śabda)は本性上、無限の原子が一つの蘊となったもので、様態(paryāya)なのである<sup>(19)</sup>。

すべての原子には、味・色・香・触という同時的に存在する(sahabhāva)属性(guṇa)がある。それらは[日常的には]順次的に発生する(kramapravṛtti)それ自身(=原子)の様態として存在する<sup>(20)</sup>。

即ち Amṛtacandra によると、śabda は原子の集合(蘊)としてはじめて存在するもので、これを物質という実体の様態(paryāya)として位置づけられているのである。この物質の様態は、原子の集合体である土塊が場合によって壺などに変化するように、物質の順次発生的(kramapravṛtti)な状態変化を示したものである。これに対して味・色・香・触という四性質は、原子に必然的にそして同時に(sahabhāva)に存する属性(guṇa)として考えられているのである<sup>(21)</sup>。

また Kundakunda の別の代表作 PS においても同様に śabda そして触・色等について次の如く述べる。

微細なもの(=原子)から大地に至る物質には、色・味・香・触がある。

しかし śabda（音声）は多様な物質である。（PS. II. 40）

AmṛtacandraはこのPSの註釈において、やはり属性と様態の概念を用いて説明し、śabdaがどうして属性（guṇa）でないのか、について次のような議論を展開している。

伝えるところによると、感官によって知覚されるべきものは、触・味・香・色である。それ（感官）の認識対象であるが故に。それら（触等）は感官対象性（感官によって知覚されること）が顕現しているのか、〔顕現せず〕能力としてあるのか、ということによって知覚されたり、知覚されなかったりするるのである。〔そしてこのことは〕1個の実体を本性とする粗大な様態、即ち大地という蘊に至るまで、すべての物質に区別なく、特殊な属性として存在する。それらは物質であるから、他の実体（jīva など）に生ずることはなく、〔物質を〕物質たらしめるものである。

śabdaもまた感官の対象であるから属性であると理解されるべきではない。多様・複雑・多種の特相を有するそれ（śabda）は、多くの実体を本性とする物質の様態として認められているから。

もし〔śabdaが物質という実体の〕属性であるとするならば、まず śabdaは精神的な実体（jīva）の属性ではない。精神的な実体が聴覚器官の対象となってしまうから。というのは属性を有する基体（guṇin）と属性（guṇa）の両者は、区別のない空間点であるので、知覚と知覚対象が同一となってしまうから。

また〔śabda〕は物質的実体の属性でもない。様態の特相によって否定されたのが属性の特相であるから。なぜなら様態の特相は一時的であるということ（Kadācitkatva）であり、〔一方〕属性の定義は恒常であること（nityatva）であって、〔両者は矛盾するものであるから〕。故に śabdaは属性ではない。〔śabdaが〕一時性〔という様態の特相〕によって永遠性〔という属性の特相〕が否定されたから<sup>(23)</sup>。

この *PS. 40* は *Pañ 81* とほぼ同義である。Amṛtacandra の註解によると、触等の四は原子が単独の状態であろうと、大地のような粗大な集合として存在しようとして、常に原子に内属する属性 (guṇa) である。この属性はすべてにおいて知覚されるという訳ではないが(例えば一原子における触等)、知覚されずともそれは顕現していないだけであって、知覚を生起せしめる能力として1原子内に保持されているのである。

これに対して śabda は1原子に内属しえず、多様等の特相とする様態である。ここで Amṛtacandra は、もし śabda が属性であるとする、精神的な実体の属性としても、物質的な実体の属性としても不合理であるとする。つまり śabda が命我(jīva)という精神的な実体の属性であるならば、本来知覚対象である śabda が知覚する側の精神的実体となってしまう、という過失が生じる。また śabda が物質の属性であっても、属性の特相である「永遠性」が śabda にはあてはまらない、という点が指摘される。ジャイナにとって原子が永遠の存在である限り、これに必然的・同時的に内属する4属性も「永遠性」という特相をもたねばならない。しかし śabda は永遠の原子に内属することなく、その集合の状態によって順次変化していく様態であるので、「一時性」という特相として位置づけられ、「永遠性」を特相とする属性とは区別されるのである。

以上の如く Umāsvāti の *TAS* とその註釈、ならびに Kundakunda の *Pañ, PS* そして Amṛtacandra の註釈によって śabda をみてきたのであるが、*TAS. V. 23* で śabda のみが排除されていたように śabda が感官の五つの対象の中で、他の四と区別されて位置づけられたことが明らかになった。*TASbh* や Kundakunda の網要書では、1原子に内属するか否かによって、śabda と他の四とが区別されたのであるが、Amṛtacandra の註釈では、*TAS. V. 37* の、dravya と guṇa・paryāya というジャイナ独自の存在論的区分けが適用されていたのである。尚 *SAS* では、*TAS. V. 24* の śabda 等を「物質の

変異 (pudgalavikāra)』とし、paryāya という語は用いられないものの、vikāra という同様の概念として捉えられている。

ところで Amṛtacandra よりも以前に、śabda を paryāya として定義していたのが、Akalaṅkadeva である。彼の *SVin* の Śabdasiddhi 章では、次のように述べられている。

śabda は物質の様態 (paryāya) であり、蘊 (skandha) である。影や熱の如し。[そしてそれは]知の結果であり、自他の対境に対して区別を本性とする言詮である<sup>(24)</sup>。

このように Akalaṅka は śabda を明確に物質の様態として定義し (SAS の記述 vikāra を踏まえたものであろう)、原子の集合したものとしたのである。śabda の同喩としての「影や熱など」は無論 *TAS*. V. 24 に依拠したものであろう。また śabda を「知の結果 (buddhikārya) としたのは、Anantavīrya の *SVinTika* によると、'ga' 等の文字を śabda として捉え、これを非人為的とする一派 (Mīmāṃsā 派) の見解を排除するためであるとされる<sup>(25)</sup>。

c. ジャイナ哲学における śabda の可触性について

ところでこの *SVin* の偈文では skandha という語が、śabda の存在形態として述べられていたのであるが、これに対する Anantavīrya の註釈に次のような推論式による解説を見ることができる。

〔偈中の〕 skandha (蘊) とは部分を有する実体のことである。

〈推論式 1〉

「śabda は蘊である。」(宗)

「物質は我々などによって知覚される限り、部分を有するものであるから。」(因)

「布等の如し」(喩)

〈推論式 2〉

「それ (śabda) は物質である。」(宗)

「可触性を有するから。」(因)

「それ(布等)の如し。」(喩)

〈推論式 3〉

「それ(śabda)は可触性を有する。」(宗)

「硬い・柔かいなどの観念として知覚されるから。」(因)

「それ(布等)の如し。」(喩)

この〔推論式〕は不成〔因〕ではない。世間周知のことであるから<sup>(26)</sup>。つまり、ここでは〈推論式 1〉によって、まず śabda が蘊として存在することが論証される。続いてこの証因において、「部分を有すること」の前提条件としての「śabda が〔我々などによって知覚される〕物質であること」が、〈推論式 2〉で論証されている。さらにこの〈推論式 2〉の証因「可触性を有するから」が、pakṣadharmatā (小前提の確認)という条件を満たしているかどうか、さらに〈推論式 3〉で論証されていたのである。即ち〈推論式 1〉の証因は〈推論式 2〉によって、そして〈推論式 2〉の証因は〈推論式 3〉によってそれぞれ確認される、という多重構造の論証によって、śabda が蘊であることが主張されたのである。

ところで、ここで特に注目すべき点は、〈推論式 2〉〈推論式 3〉で証明されていたように、ジャイナにおける śabda とは、聴覚器官の対象であるばかりでなく、可触性を有するが故に触覚器官の対象ともなっていることである。このような学説は先に示した ŚV の紹介するジャイナ教の śabda 観にも指摘されたのであるが、ジャイナ側の文献としてここに見い出されたのである。

また Devasūri の *Pramāṇanayattattvālokāṅkārā*, IV, 9 でも物質的言語論が述べられているが、註釈 RA ではここで śabda を物質と認めない Nyāya 派の見解の根拠を 5 つにまとめて、それぞれを論難している。このうち第 1 の根拠「śabda の基体が可触性を有しないということ」によって、Nyāya 派が śabda は pudgala ではないと主張するのに対し、Ratnaprabhāsūri (RA の著

者)はジャイナの立場より次の如く論難する。

第1の主張は「正しく」ない。śabda という様態の基体(原子)は bhāṣāvargaṇa (言語種)を特相とするが、「その原子に」可触性がないということは、単に知覚されないというだけでは成立しない。それ(原子に可触性がないこと)は矛盾を伴うから。……(中略)……

「śabda の基体は可触性を有する」(宗)

「順風のときには遠くの人にも知覚されるが、逆風のときには近くの人でも知覚されない、というような、感官の対象であるから」(因)

「そのような種類の、香りを有する実体の如し」(喩)<sup>(27)</sup>

以上の如く、Ratnaprabhāsūri によっても推論式を通して、śabda の可触性が証明されている。前述の如くジャイナは物質であるものはすべて原子から構成され、その1原子の中にすでに可触性が認められていたのである。従って śabda がこの可触性を有する原子の集合である限り、śabda にも当然可触性は存在するのである。我々は1原子において可触性を知覚することは不可能であるが、それは1原子に能力として潜在化しているのであって<sup>(28)</sup>、可触性そのものが否定された訳ではない。知覚条件を整えば、śabda の可触性も知覚されうる、とジャイナ教徒は考えていたのである。

#### IV. お わ り に

以上、ジャイナ教の śabda について、その物質的言語観をみてきたのであるが、そこでは śabda が他の感官の対象と存在論的に異なって捉えられている。ところで説一切有部も同様に śabda を原子の集合と考えているが、彼らによると十色界(五根と五境)はすべて原子の集合によるとして考えられ<sup>(29)</sup>、śabda と他の触等の四との存在論的区別はない。

また Akalaṅka や Amṛtacandra によると、śabda が paryāya として定義されていた。これは *TAS* や *Pañ*, *PS* において、已に dravya と guṇa・par-

yāya の概念が存在し、これを感官の対象について分析し適用したことによるもので、ジャイナ独自の śabda の位置づけとなっている。ところでジャイナ哲学における dravya と guṇa の関係は実は Vaiśeṣika 派の影響であると考えられ、特に Kundakunda はこの関係を Vaiśeṣika 派の samavāya と同一の概念として説明している<sup>(30)</sup>。しかしジャイナと Vaiśeṣika 派のこのような密接な影響関係にもかかわらず、Vaiśeṣika は śabda を虚空の guṇa として捉え、一方ジャイナはこれを明確に否定したのである。この問題をめぐるジャイナの批判はいくつかの文献にみることができるが、それらの検討は他日に期したい。

《略号表》

<i>Pañ</i>	<i>Pañcāstikāya</i> , (Śrīmad Rājachandra Jaina Śāstramālā) 3rd edition, Agas, 1969.
<i>PS</i>	<i>Pravacanasāra</i> (Śrīmad Rājachandra Jaina Śāstramālā), ed. by A.N. Upadhye, Agas, 1964
<i>NM</i>	<i>Nyāyamañjarī</i> of Jayantabhaṭṭa Vol.1 (Oriental Research Institute Series No.116), ed. by K.S. Varadācārya, Mysore, 1969.
<i>RA</i>	<i>Ratnākaraṅgatārikā</i> , Part II, (Lalabhai Dalpatbhai Series No.16), ed. by D. Malvania, Ahmedabad, 1968.
<i>SAS</i>	<i>Sarvārthasiddhi</i> (Bhāratīya Jñānapītha Mūrtidevī Jaina Granthamālā, Sanskrit Grantha No.13), Varanasi, 1971.
<i>ŚV</i>	<i>Ślokaṅvarttika</i> of Śrī Kumārila Bhaṭṭa, (Prachyabhārati Series 10), ed by D. Sāstri, Varanasi, 1978.
<i>SVin</i>	<i>Siddhiviniścaya</i> , in <i>Siddhiviniścayaṭīkā</i> of Anantavīrya, Vol.2, (Jñānapītha Mūrtidevī Jaina Granthamālā Sanskrit Grantha No.23), ed. by Mahendra Kumar, Varanasi, 1959.
<i>TAS, TASBh</i>	<i>Tattvārthādhigamasūtra</i> with <i>Bhāṣya</i> , (Śrīmad Rājachandra Jaina Śāstramālā) Bombay, 1932.
<i>TAV</i>	<i>Tattvārtharvarttika</i> Pt. II (Jñānapītha Mūrtidevī Jaina Granthamālā Sanskrit Grantha No.20) ed. by Mahendra Kumar, Banaras, 1957.
<i>TPV</i>	<i>Tattvapradīpikāvṛtti</i> on <i>Pañcāstikāya</i> , (Śrī Rājachandra Jaina

	Śāstramāla) = <i>Pañ</i>
TS	<i>Tattvasamgraha</i> , Vol. 2, (Bauddha Bharati Series 2) ed. by D. Śāstri
VP	<i>Vākya-padīya</i> , (Abhandlungen Für Die Kunde Des Morgenlandes, Bd. 42.4) ed. by W. Rau, Wiesbaden, 1977.

## 註

- (1) 'evaṃ tarhi sphotaḥ śabda dhvaniḥ śabdaguṇaḥ' *Vyākaraṇa Mahābhāṣya*, Vol. I, ed. by F. Kielhorn, p. 181, ll. 19-20. 服部正明「Mīmāṃsāsloka-vṛttika, Apohavāda 章の研究(上)」『京都大学文学部紀要』Vol. 14, 1973, p. 15 参照。
- (2) 'śabda' mbaraguṇaḥ śrotagrāhyaḥ kṣaṇikaḥ' The *Praśastapāda Bhāṣya* with Commentary *Nyāyakanḍalī* of Sridhara, ed. by V.P. Dvivedin, 1885 (rep. 1984), p. 287, l. 17. 金倉圓照『インドの自然哲学』, 1971, p. 211 参照。尚 *Vaiśeṣikasūtra* の掲げる 17 の guṇa には śabda は含まれていない。
- (3) ジャイナ教も仏教と同様に pramāṇa を二種に分類し, śabda (聖言量) を間接知 (parokṣa) に含める。 *Pramāṇamīmāṃsā* (S. Mookerjee 本), p. 9. 長崎法潤『ジャイナ認識論の研究』京都, 1988, pp. 210ff 参照。
- (4) この七種の Naya は空衣派の文献 (SAS, TAV etc) に従った。白衣派では 5 種を教えるのみである。(TASBh. I. 35)
- (5) 以上の説明は, 宇野惇『ジャイナ教の研究』(『広島インド学研究叢書』第 1 号), 広島, 1986, pp. 75-76 に基づく。
- (6) TS, p. 775, ll. 2-5. 尚, 伊原照蓮「ヨーガ派のスポータ説」『密教文化』第 74 号, 1966 参照。
- (7) TSPañjikā, p. 775, ll. 9-10.
- (8) VP, p. 47. 中村元『ことばの形而上学』東京, 1956(1981 第三刷), pp. 266-267 参照。
- (9) *Vākya-padīya* of Bhartṛhari with the Comentaries *Vṛtti* and *Paddhati* of Vṛṣavadeva Kāṇḍa, ed. by K.A.S. Iyer, Poona, 1916, pp. 173-174.
- (10) SV, pp. 535-536.
- (11) この他, Jayanta Bhaṭṭa の NM においても, 「しかるにジャイナ教徒達は次のように述べる。śabda は音声 (śabda) の物質より成る構成体であり, 自ら発した場所から人に向かって伝わり, 耳の元に達する。」(p. 536) として紹介され, やはりその物質的言語観を伺うことができる。
- (12) 尚, 前述の如く VP に言及された śabda 原子説の記述 (VP, I. 113cd) がこの TAS. V. 24 の十項目から抽出されていることは明白であろう。



- (13) *TASBh* では *tata* 音等の名前を列挙するだけであるので *TASBhṬīkā*, Pt. I (Sheth Devchand Lalbhai Jain Pustakodddhar Fund Series No. 67) ed. by H. R. Kapadia, Bombay, 1926, p. 360 を参照した。
- (14) *TASBh*, p. 270, ll. 23
- (15) *SAS*, p. 219, ll. 3-8.
- (16) *TASBh*, p. 273, ll. 23-25.
- (17) *Pañ*, pp. 131-138.
- (18) ジャイナの原子論ではこのように一原子に *sparśa* 等の四を認めるが、これをもって原子が四つの部分を有する、とジャイナは考えない。後述の如く *dravya* と *guṇa* という必然の関係として原子に *sparśa* 等が内属するのであって、*sparśa* 等は決して *dravya* として存在するのではない。  
 ところで金倉圓照博士によると、ジャイナの原子説について「1 原子は色味香の性質をもっているが、2 原子として結合すれば可触性を生ずる。」(『インド哲学史』p. 39) と述べておられる。恐らくこの *Pañ* 81 の記述によったのかとも推察されるが、この *Pañ* の説明では、二原子によって可触性があると述べているのではなく、二種の可触性としていわれているのである。この他 *Kundakunda* の *PS* や *TASBh* 等々の説明をみても、「2 原子として結合すれば可触性を生ずる」という学説は見い出せない。
- (19) *TPV*, p. 134, ll. 6-7.
- (20) *ibid*, p. 138, ll. 6-7.
- (21) この点については、第三回ジャイナ教研究会(1988年10月29日、於大谷大学)で研究発表を行った際、宇野惇教授より貴重な御教示をいただいた。宇野惇、前掲書、p. 75 参照。
- (22) *Tattvapradīpikāvṛtti* (*PS* の刊本に掲載、*Pañ* の *TPV* とは同名異書)、pp. 168-169.
- (23) *ibid*, p. 168, ll. 3- p. 169, ll. 5.
- (24) *SVin*, p. 593, ll. 26-27.  
*śabdaḥ pudgalaparyāyaḥ skandhaḥ chāyātapādivat buddhikāryo viśeṣāt-mābhilāpaḥ svārthagocare //2//*
- (25) *SVinṬīkā*, p. 595, ll. 19f.
- (26) *ibid*, p. 594, ll. 20-22. 尚、この推論式について、東北大学講師小林守氏に貴重な助言をいただいた。
- (27) *RA*, p. 118, ll. 21ff.
- (28) *ibid*, p. 118, ll. 22f. *Tattvapradīpikāvṛtti* (ad. *PS*) p. 168, l. 3.
- (29) 'saṃcitā daśarūpāṇaḥ' *Abhidharmakośa*, (Tibetan Sanskrit Work Series Vol. VIII), ed. by Pradhan, Patna, 1975, p. 24, l. 17
- (30) *Pañ*, 50. 金倉圓照『印度精神文化の研究』pp. 253, 266 参照。

# Śabda in the Jaina Philosophy

Yoshinori ANDÔ

In the Indian philosophy the Skt. term śabda has many meanings (sound, word, one of the correct knowledges etc.). This paper treats of this śabda (especially concerning sound and word) which the Jaina scholars discussed.

Some scholars of the other schools (Kumārila Bhaṭṭa, Śāntaraḥṣita, Kamalaśīla etc.) introduce the Jaina conception of śabda. According to them the śabda which Jainas think is the manifestation of Pudgala (matter). The Tattvārthasūtra declares that śabda is one of the five objects of sense-organs (2.21) and that these five objects etc. characterize the matter (5.23-24). But the Tattvārthasūtrabhāṣya and Kundakunda's Pañcāstikāya clearly distinguish śabda from the other four objects of sense-organs (touch, taste, smell and colour). The latter exists in one atom but the former does not. Śabda exists only in the aggregate of atoms.

Amṛtacandra (who wrote the comm. of Pañcāstikāya and Pravacanasāra) pointed out that four objects (touch etc.) are guṇa-s (qualities) and that śabda is paryāya (mode). This idea is based on the Tattvārthasūtra, 5.37. Though in other schools (ex. Buddhists) these five objects are treated equally, in the Jaina metaphysics śabda is separated from the other four objects.